



1 3 → 1

わたしたち から あなたへ

まえがき

私たちは、「自分の変化を振り返ろう」という思いでこの本を作り始めました。13人がそれぞれの変化を振り返り、自分自身と向き合うことを繰り返しました。また、それぞれの文章を読み合うことで、互いの変化に触れ、自分に置き換え、受け取ることができました。

この本を手にとったあなたも、自分らしく受け取ってみてください。
あなたの“今まで”と“これから”が変化しますように。

「13 → 1 -わたしたちからあなたへ-」
わたしたちの13通りの変化をあなたへ

もくじ

現代こども学科特集	4
---------------------	---

1 章 視野を広げてみると

▷ 面白さの先の楽しさ	8
▷ ひとりの意味	10
▷ それめっちゃいい!	12
▷ 夢	14
▷ 失敗を認めること	16

2 章 勇気を出せば

▷ やってみよう	20
▷ 「勇気」が見せてくれた世界	22
▷ 気づくこと 向き合うこと	24

3 章 気づいたら

- ▷ 新しい出会い 28
- ▷ 学びの世界 30
- ▷ 楽から楽しいへ 32
- ▷ 「自分ごとを考える」ということ . . 34

吉永先生より

- ▷ わたしを物語り,
わたしと出会い直す旅路に伴走して
. . . 36

あとがき 40

編集後記 42

現代こども学科特集

1人ではなく、みんなで授業を作り、それぞれの学びを見つける・・・
それが現代こども学科



LEGO 【教育方法と技術】

音楽に合わせて、様々な条件のもとLEGOを高く積み上げていきました。LEGOの高積みを通して、自然と環境の変化によって自分自身の感じ方や見方が変化することを学びました。

グループワーク

こども学科の授業では模擬授業やプレゼンなどグループワークをする機会が多くあります。自分たちでグループを決めることもあれば、初めて話す人とグループになることもあります。いろいろな人と関わることで新しい考えに出会うことができます。



DANCE PERFORMANCE

大学に入学後、2週間で出会ったばかりのクラスの人たちとダンスパフォーマンスをする機会がありました。2週間という短い時間で協力して練習し、最終的には、同志社大学のロームで発表しました。



海外こども事情B～台湾研修～

8月23日から9月1日の10日間台湾へ海外研修をしに行きました。3回生2人、2回生15人の計17人で現地へ向かいました。台湾では、現地の教育現場をはじめ様々な施設を訪問し、学び合い交流を深めました。実際に足を運んでみないとわからない体験や経験が詰まった10日間でした。

こどパ（こどもパーティィ）

こどパとは、学生主体のプロジェクトです。
このプロジェクトでは京田辺の小学生を招待し1日を通してゲームやものづくりを体験してもらいます。こども学科の1～3回生が学年を問わず1日のために1年かけて活動することで横のつながり、縦のつながりを作ることができます。



オリエンテーションリーダー

現代こども学科では、入学式の次の日から1泊2日のオリエンテーション合宿を行います。ここでは、A～Fの6つの組に分かれて、大学生活について知ることから、立食パーティー、レクリエーションゲームまで様々なプログラムをします。この合宿を作っているのは、2回生になる現代こども学科の先輩たちです。4月に入学してくる新入生のことを考え、1からすべて作り上げています。

視野を広げてみると

1

視野を広げてみると
新しい自分になりたくなった

面白さの先の楽しさ

今まで出会ったことのない考え方の人々と出会い、たくさんのグループワークをしていく中で、大学で今まで感じたことのない面白さや楽しみ方を知った。

私は今まで、「楽しむ」ことを大前提として生活してきた。面白そうなのは自分からするが、与えられたものや嫌なこと、やりたくないことはその場で楽しみを見つけてきた。

また、もともと私は自分の意見を積極的に発言することは苦手だった。その場その場で言われたことをする。さらに、その場で人の意見に乗っかり、自分で考え判断することがあまり得意でなかった。

しかし、こども学科に入学すると自分自身も意見を言わないといけない雰囲気が多かった。入学当初のグループワークでは、人の意見を聞き、今までのようにその場で決められたことに乗っかり、楽しみを見つけていた。

何度もグループワークを繰り返していくと、自然に自分の意見を言ってしまうような環境が、だんだんと増えていった。このことがきっかけで、自然に自分の意見を言えるようになった。

自分の意見を言う。その意見に対して誰かが突っ込む。その突っ込みに対してみんなでもた突っ込む。この流れの面白さに気づいた。1つのお題について「あれは?」「これは?」「そしたら?」と、どんどん深く考えていく仲間を見て、「私もその輪に入りたい!面白そう!」と感じた。

グループワークで全てが解決するわけではない。しかし、解決がなくても「次どうする?」など色々な作戦を考えた。その中で、試行錯誤していく面白さ、「そんな考え方もあるんだ!」という面白さも感じた。

これらの面白さを感じる為には、与えられたものから楽しさを作り出すのではなく、自分から作り出す。自分から作り出す1つの手段として、自分の意見を言うことだ。意見を言うことで、その先にはみんなでも意見を突っつき合い、そこでいろいろな発見につながり「面白い!」に繋がることが分かった。また、その「面白い!」の先には、

「考えることは大変だった、だけどやって良かった。」「楽しかった！」と感 じる こと が できる。

私は中学・高校・大学と進学する時に、決まった道や決められた選択肢の中から楽しそうなことを選択してきた。しかしこれらの面白さを知り、与えられたものから選択することが勿体無いと分かった。

このような考え方の変化より、初めから自分で「面白そう！」と感 じる 物 を 作 っ て い く 楽 し さ を 知 っ た。また、今までとは違い選択肢が増え、また選択肢を自分から作ることもできる。これからの進路にあたって、自分自身が楽しみながら考えていくことができていると感じている。

ひとりの意味

私は中学生の頃から、何事に対しても100点を求めず、ある程度できたらOKだと思っていた。本気で取り組むものに出会えていなかったというよりも、自分がその場面に会っても本気で取り組まない選択をしていた。高校の入学当初、クラスメイトは、中学校の友だちとは大きくかけ離れた印象だった。心のどこかで「こんな友だちなんていなくても、独りでいい」そう思い、大きな壁を作ってしまった。振り返ってみると、これは失敗だった。

独りになった私は、1年生の後半から、部活動以外でも仲のいい友だちが欲しいと思い、学年が上がるのをきっかけに数人のグループに入った。その頃の私は周りに合わせるのが当たり前で、特に自分の方向性を決めることはなかった。そして、そこそこ楽しく、高校生活を終えた。

しかし、私は大学生になって周りの友だちが「本気だからこそ充実している」様子を目の当たりにした。このことから、私も「何か」をするときに「どうせやるなら本気で取り組みたい」、「意味のある時間にしたい」と考えるようになった。こどバを3年間続けた理由も、吉永ゼミを選んだ理由も様々な場面で、少ししんどいかもしれないという考えもある中で、自分のためになると思う方に進むようになった。その中で得られた考え方が、「自分のために頑張ることは人のためにもなる」ということだ。自分が頑張ることでチームの士気が高まり、良い方向に向かうことを身をもって体験した。そして、グループに対する考え方が「自分のためのグループ」から「グループのための自分でありたい」に変わった。

このような体験を経て、選択を迫られたとき、自分で考えることが多くなった。何も考えていなかった中学時代、何でも友だちに合わせ、先生が言うことに従うだけの高校時代とは異なり、自分で考えて行動することが増えた。

私にとってグループで一緒にいることが、他人とは異なる自分の一部を隠すためのものであった。しかし今は、友だちが自分に良い影響を与える存在になった。

高校の入学当初の「独り」と今の「1人」の意味が大きく変わった。これは、友だちの在り方の変化である。授業で組むグループだけでなく、大学生活で一緒にいるグループもすべてが友だちと一緒にである必要は無い。自分の考えを相談しつつ、自分自身で行動に移すことができるのではないかと考える。興味関心の違いがあって当たり前だと余裕のある考えをするようになった。だからこそ私は「グループ」でも「独り」でもなく、「1人」でいることができるようになった。

それめっちゃいい！

大学に入学してから、いろいろな授業でグループワークをする機会が多くあった。はじめの方、私は人の話を聞かずに自分が「これがいー！」「これが面白い！」と思ったことを主張して、相手の意見を聞くことが二の次になってしまうことが多かった。その結果、人の意見や気持ちを押しつぶしてしまうことが多々あった。自分のそういう短所に、大学生になって初めて気づいた。

このことに気づいてからも、自分を柔軟に変えていくことができずにいた。実際の話し合いでは自分ばかり話をしていて、まわりの子は全然楽しくなさそうであまりいいことばかりだった。何度かまわりの子に意見を求めようとしたが、「自分の考えのほうがいいと思うけど、それを言ったらまた自分の意見を押し付けてしまう」「でも思っているのに言わないのってやる気ないのと同じじゃん」と思った。そして、自分の中でどうしていいのか分からずに固まってしまうことも多々あった。私は「自分の思っていることを置いておいて、相手の意見を聞くこと」と「自分の考えを妥協すること」の違いが分からずに悩んでいた。そうしていくうちに、私は、グループワークをすることが嫌になっていた。この時の私は、みんなで何かを成し遂げることよりも、自分の中で一番良いと思っていることを形にすることに、楽しさを感じていたのだと思う。

しかし、大学1回生の末に参加したオリエンテーションリーダー（オリテ）をきっかけに、私の考えは少しずつ変わっていった。オリテでは、私以外の同級生5人と一緒に、新入生を迎える準備を2か月間行った。オリテをするまで話したこともなかった6人が集まっていて、はじめの方の私は「みんなで何かするのちょっと嫌かも」と思っていた。しかし、得意なことも苦手なことも違う6人で2か月間も一緒に活動する中で、自分には思いつかなかったような視点を他の5人は持っていることに気づくことができた。だからこそ、お互いに支え合い、補い合いのできるチームになることができた。そこでの話し合いには、自分ばかりが話をしている状況はなく、6人全員で新入生のために真剣に話し合っていた。もちろん、私も自分の考えを伝えることを妥協をしなかった。

そうしてできたオリテは、私1人でイメージして形にするよりも何倍も楽しくて、納得いくものだった。

3年半の大学生活で、いろいろな仲間と出会った。みんなで何度もグループワークや何かを作り上げていく経験を重ねていく中で、「みんながみんな自分と同じではない」ということを本当の意味で理解することができた。今までの私は、自分の考えを主張するばかりで、一緒に頑張る相手を尊敬する心が足りていなかった。これからの私は、自分だけの視点から一人で思い通りのものを作るよりも、一緒に頑張る仲間を尊敬し、いろいろな視点からみんなで良いものを作れるようになりたい。

自分の意見を持って、それを相手に伝えることはもちろん大切だけれど、相手のことを慮って尊敬する気持ちを忘れないことはもっと大切だという事を学んだ。

そんな私が、前よりも自然に言えるようになった言葉。

「それめっちゃいい！」

夢

私は小学生のころから、幼稚園の先生になることが夢だった。その夢は変わらず、大学生になるまでは自分の将来の夢に迷いが生まれることなく過ごしてきた。

大学生になって、なぜ幼稚園の先生になりたいのか、と聞かれると、「こどもが好きだから」という答えしか自分の中になかったことに気づいた。あと4年で学生生活が終わり、社会人になる。このことを少しずつ実感し始めたころでもあり、「こどもが好き」という理由だけでは夢を追いかけることができないのではないかと感じるようになった。

1回生の秋になり、進路選択をしなければいけなくなった。幼稚園教諭の免許のみ取得するという選択もできたが、「なるつもりはないけど、ついでに小学校教諭の免許も取っておこう。」そんな思いで幼小課程に進むことを決めた。今振り返ると、この選択が私の将来の夢の転機になっていたように思う。

2回生になり、小学校教育について学ぶことが多くなった。模擬授業で教えることへの楽しさを感じ、実際の小学校現場への興味・関心が自分の中で高まっていった。そして、「小学校の先生になりたい」という思いが芽生え始めた。このことから、私はもう一度自分の進路について向き合うようになった。そして私は、小学校の先生を目指すという決断をした。

この文章を書きながら自分の決断を振り返ることで、気づいたことがある。昔の私は幼稚園の先生になることがゴールのように感じていて、その先のことを全く考えていなかった。しかし、今は小学校の先生になったその先にまた新しい目標があり、ゴールはないように思う。ずっと「なりたい夢」だったものが、「やりたい夢」になっていた。少しの言葉の違いだが、私は「なりたい」の先に「やりたい」があるのではないかなと思う。この変化が、今の夢に自信を持てるきっかけになったのではないだろうか。

「変化」というと結果だけのように感じていたが、振り返ってみることで自分でも気づいていなかった変化のきっかけに気づくことができた。1回生の秋、「ついでに」と幼小課程に進んだことが今の自分を作るきっかけになっていた。このように、思いもよらぬところに自分を変えるきっかけは潜んでいて、自分でも気づかないうちに変化し始めているのかもしれない。

失敗を認めること

「失敗」は敵。失敗することほど、ダサいものはないと思ってきた。

私が今まで経験した「失敗」はひとつだけ。中学受験に失敗したことだ。小学生ながらに受験に向けて必死に勉強した。絶対に合格すると思っていた。しかし結果は不合格。受験に失敗した事が恥ずかしくて仕方がなかった。「頑張って勉強したのに、落ちた自分」がダサくて受け入れることができなかった。この出来事をきっかけに、私は「失敗」というリスクがついてくるものから逃げてきた。

「やればできるのに」という言葉を幾度となく言われてきた。自分でも良く分かっていた。もう少し頑張れる、ということが。それでも「失敗」したくない私は、自分の中での限界を決め、それ以上は向き合おうとしなかった。高校受験・大学受験では、「行きたい学校」を優先して選ぶのではなく、「失敗しないかどうか」を最優先に考え、選んだ。部活のコンクールメンバーを選ぶオーディションでは、課題曲を提示されていたが、頑張って練習してメンバーから外れるくらいなら、初めから練習せずに落とされる方が良いと思い、練習せずに挑んできた。実際、自分の想定内での「失敗」はあったものの、想定外の「失敗」を経験することなく過ごしてきた。それでうまくいくのなら、私はそれで満足だった。大学生活でもうまく自分をコントロールして、それなりに充実した4年間で過ごすことができれば良いと思っていた。しかし、こんな考えを持って過ごしてきた私に、転機が訪れた。

大学に入学し、最初に出された課題が2週間でダンスパフォーマンスを完成させることだった。ダンスをやったことのない私にとっては「失敗」するリスクがとても高かった。いつものように、無理だと判断した私は「できない」と逃げようとした。

そんな時、頭の中にある「できない」の部分を「どうすればできるのか」に置き換えることで、できる可能性が生まれるのではないかと、いう考え方に会った。今まで、「できない」と思うことには目を背け、向き合ってこなかった私にとってこの考え方はとても新鮮で、納得し、「どうすればできるのか」という課題に向き合おうと思った。

結果、2週間でダンスを完成させ、人前でパフォーマンスすることができた。

この2週間、できないところは「どうすればできるのか」と考え、実践し、うまくいかなかったところを修正していった。振り返って見ると、自然と「失敗」を繰り返していた。しかし、あの時は「失敗した」という認識はなかった。より良くするための材料だった。この経験が「失敗」に対しての考え方が変わったきっかけだ。「失敗」を「失敗」だと思うか、次のステップへの「踏み台」なのか、捉え方によって、自分自身の成長へつながると知った。

この本を書くまでは、中学受験の「失敗」は私の中で抹殺していた。しかし、今考えてみれば、あの時の「失敗」がなければ、今の私はいない。「失敗」することも含めて、「私」である。

自分の失敗を認めながら、これからも成長し続けたい。

勇気を出せば

2

勇気を出せば
新しい自分になれた

やってみよう

今までの私は、様々なことに挑戦してみたいという向上心があったものの、「自分にできるだろうか」「失敗したらどうしよう」と不安になり、新しいことに挑戦する一歩を踏み出せずにいた。

大学入学後、2週間で出会ったばかりのクラスの子19人とダンスパフォーマンスをする機会があった。人見知りの激しい私は、自分にできるか不安で、また、苦手なダンスをまだ仲良くなれていない友達と踊ることに抵抗があった。しかし、それは避けては通れない道だった。2週間という短い期間だったからこそ、考える時間がなく、行動し、やるしかないという状況だった。そして、本番を終え、私は19人全員で2週間でダンスを踊れたこと、本番楽しめたことに達成感を感じることができた。

この出来事から、2つのことを学んだ。

1つ目は、初めての経験が自分にできるかどうかはわからないということ。2つ目は、実際にやってみないと自分にできるかどうかは判断できないということだ。初めての挑戦には、たくさんの不安や失敗、壁がある。その都度、どのようにしたら乗り越えられるのかを考える。

このような経験から

【自分にできるかわからない/不安→やらない】のではなく、

【自分にできるかわからない→でも、とりあえずやってみよう】

と考えるようになった。

以前の私は、“失敗”という言葉ネガティブに捉えていた。しかし、実際に失敗を経験することで、その失敗を糧に次にどう生かすかという捉え方変わった。また、新しいことに挑戦し、一歩踏み出し失敗したからこそ見える視点がたくさんあると気付いた。これらの考えの変化から、今しかできないことがあることに気づいたからこそ、失敗をしてでもたくさんの経験をして、自分の可能性を広げていきたいと考えるようになった。

たくさんの経験から自分が自信をもって成長できたといえるのかはわからない。まだまだ自分自身奮闘中であり、これからもたくさんすることに挑戦していきたい。できるか分からなくても、まずは「やってみよう。」たくさんの失敗に直面したとしても、その都度壁と向き合い、考え続けていきたい。

「勇気」が見せてくれた世界

少しの「勇気」で変わったことがある。

私は今まで何をするにも慎重で、一步踏み出すのに勇気が出せない人だった。なので何かをするとやめる勇気もなかったが、良く言うと、長く続けられる長所を持っていた。このことから、高校まではバレーボールを10年間続けることができた。毎日バレーボールと勉強に縛られていたため、自分で考えて自分のしたいことをするという時間がなかった。また、自分の考えで動かず、誰かについて安全な道を行くようにしてきた。

大学に入ると、何かをしたいけれど何をしたらいいのかわからない。何でもできる環境になった。しかし、自分で行動しなければ何も起らない。この環境はレールの上に乗って進んできた私には苦痛だった。

高校までは部活で毎日忙しかった私に自由な時間が沢山与えられた。何かをしたいけれど、何をしたら良いか分からない。こんな毎日に、子ども学科の先生が

「やらずに後悔するよりも、やって後悔したほうがいい」

「失敗してもいいからやってみな」

「今しか失敗できないよ」とよく言っていたことを思い出した。

この言葉に出会った私は、大学2年生の夏、高校の時から「大学に入ったら絶対に留学をしたい。」と思っていたことに挑戦することにした。

この一步を踏みだす「勇気」で大学生活が大きく変わった。

とことん英語に触れたかった私は、1人で留学することに決めた。たった2か月の留学だったが留学先ではいろいろな価値観に触れることができた。1人で行くことで、日本人がいない、頼れる人がいない、自分で判断して自分で行動しなければならないといった環境に置かれた。

英語が話せないことを恥ずかしいと思っていた私は、まずルームメイトに、「英語が話せないの」と伝えた。

するとみんな口をそろえて「あたりまえだよ！話せたらここへ来る意味がない！恥ずかしがらずに話すべきだよ、Let's speak English!」と言ってくれた。この言葉で、私は失敗を恐れていたということ、失敗することは恥ずかしいことではないと気づかされた。留学先では全員が自分の意見を持っていた。そして、自分の行きたい場所へ自分の意思で行く。自分の意思なく相手に合わせて動く人はいなかった。何か意見を言うときは“yes,no”だけでなく“because”「理由」をみんなつけていた。これはみんなが意思をもって話をしている証拠で、日本人にはない考え方、話し方だった。

初めはこの環境が苦しかったが、次第に自分の意思で行動することの楽しさが分かった。自分の意思を出すことにも「勇気」がいる。しかし自分の意志で行動すると失敗したとき、すべて「私の失敗」になる。だからこそ「私のもの」になる。そして、私の成長するための材料にもなる。また、1人で違う環境に飛び込むことは「勇気」のいることだ。しかし、新しいことに挑戦することで新しい価値観に出会うことができる。そして、視野を広げることができる。

私は新しいことに挑戦することを恐れないようにした。

この一步を踏み出す「勇気」は誰にでも持てる。

誰にでもある「勇気」を出せないのは、失敗のリスクを考えてしまうからだ。勇気を出して踏み出すことがまず大切だ。失敗は成功のための一歩であるだろう。だからこそ、失敗をした後の行動が何よりも大切で、そのとき人は一番成長できると思う。そう思えるようになった。

この一度の「勇気」で私の考え方が大きく変わり、挑戦することを前向きに捉えられるようになった。その後の大学生活では新しいことに挑戦し、新しい出会い、そして新しい自分にも会うことができた。これからも「勇気」のいる場面は私の糧になることが詰まっている場面だと思って、様々なことに挑戦していきたい。

気づくこと 向き合うこと

自分の変化と聞いて何を考えるだろうか。私はまず自分の内面的な変化を考えた。考える中で内面的な1つの変化が多くの変化へと連鎖していることに気づいた。1つの変化が次へと影響しさらに変化する。様々な変化の連鎖により私は創られ続けている。

私は今までの大学生活で様々な経験をしてきた。こども学科の授業だけにとどまらず、台湾での研修やこどパなど多岐にわたる。2回生の夏に行った台湾研修は必須の活動ではなく自主参加の活動だった。私は「新しい知識を増やしたい」「自分の視野を広げられる取り組みをしたい」という以前までなら目をそむけてきた気持ちと向き合い、参加を決意した。他者から見ると小さな一歩かもしれない。しかし、私には確実に大きな一歩だった。何事も初めの一歩は難しく、怖い。始めることは続けることとは違う難しさがある。今まで私は物事を始める一歩を踏み出すことをためらってきた。だが、台湾研修では少しの勇気を持った。一歩先の自分になるために勇気と自信を持ち、努力をし、さらに自信へと繋ぎまた努力を重ねる。このように小さな勇気が自分を変えるきっかけとなった。

また、私は3年連続こどパに参加した。3年目のこどパでは、「自分で企画を作ってみるのって楽しそう」という気持ちから、主になり活動することを決意した。今年は参加するという形で踏み出せただけでなく、集団の主になり取り組むことに挑戦した。集団の意見を聞き出しまとめることなど、主になったことでの学びがあった。指揮をとることに苦手意識があったが、こどパ本番が無事に成功したこと、同い年や後輩の学生からの感謝の言葉などにより、私はこどパを自分の自信へと繋げることができた。

今までの私は様々な経験の機会を自ら掴みに行くことはなかった。自分の世界を広げることから目をそむけてきた。自らの道を決めることから逃げ、自分に自信が持てず失敗を恐れ、1つ上の段階にいる自分になることを恐れていた。高校・大学を選択する時も、塾や学校の先生の意見を軸に自分の道を決めてきていた。

また、集団の中で指揮をとる役や話し合いの中で自分の意見を提案することは「できない自分」を勝手に想像し、自然と逃げてきていた。しかし、大学生活で様々な経験にチャレンジするようになり自分で物事を選択し、自分の可能性を信じられるようになった。

こういった変化に影響され私は自分の気持ちや考えを他者に伝えることができるようになり、集団の前でも物怖じせず話すことができるようになった。また、私にとって他者の位置付けが変わっていることに気づいた。今までは主に自分にとって尊敬する人からの言葉や考え方だけを受け取り自分のものにしてきた。尊敬する人の意見しか自分に取り入れることができずにいた。

しかし、現在では様々な人の意見を受け取るようになった。その人とは、目上の方だけでなく教育実習先の小学生など幅広い。様々な人からの考えをプラスに捉え、自分なりに噛み砕き取り込むことで、自分の道を創り上げるようになった。私の中で他者の位置付けの変化に気づいたことで、私の価値観・考え方を広げるきっかけになった。

このように私は多彩に変化している最中である。私にとっての変化は様々なものであり、1つの小さな変化が次へ繋がり、それらのすべてで今の私を創り上げていると言える。

大学生活で変化したことが今の自分の長所となり、現在の日々を送る糧になっている。自分自身が変化するきっかけは、これからの人生の中できっと何度もあるだろう。1つのきっかけから私は何度も変化し続ける。そのきっかけから逃げることなく、私はその時の私と向き合っていきたいと思う。

きっかけは何度でもある。それに気づき、向き合えるかどうかで人は何度でも変わり続けるだろう。

気づいたら

3

気づいたら
新しい自分になっていた

新しい出会い

もともと私は人に対する好き嫌いが激しく、高校までは、仲の良い人としか関わらない生活を送っていた。当時の私は勉強を一生懸命頑張ることに否定的なイメージを持っており、一生懸命になっている人に対して特に苦手意識を持っていた。そのうえ、無理をして苦手な人と一緒にいる必要はないと思っていたため、「真面目そう…」や「自分とは違う考えを持っていそう…」と感じた人とは全く関わろうとしてこなかった。しかし、私の持っていた苦手意識は、一度も関わらずに何となく、雰囲気や見た目ですぐ勝手に判断したもので、本当に苦手だったかどうかは今思い返すと分からない。

また、私は周りからの目を気にしてしまう性格だったため、見た目が真面目そうな人やおとなしそうな人と一緒にいると、自分もそう思われてしまうのではないかと、といった思いを抱いていた。親からは「そんなに自分が思っているほど周りにはあなたのことは見ていないよ」とよく言われていたが、どうしても周りの目を気にすることはやめられなかった。

こども学科に入学し、授業の中で模擬授業やプレゼンテーションといったグループワークをたくさん経験し、多くの人と関わってきた。中には「正直苦手だなあ」と直感的に感じていた人や、今までなら周りの目を気にして絶対に関わってこなかった人と同じグループで活動することもあった。しかし、活動を通して、いろいろと話をしていくうちに苦手が自然となくなり、むしろ尊敬することの方が多かった。

最初は「同じグループになったから話さないといけない」と仕方なく話していた。今まで関わることを避けてきた人と話したことで「こんなことを頑張っているのか!」や「こんな考え方があるのか!」とプラスに思うようになった。私の中にもっといろいろなことに挑戦してみようという思いが生まれた。

実際、保育士試験や英検に自分から挑戦することができ、ゼミ選択の時も仲の良い友だちに合わせるのではなく、自分が入りたい、自分のためになるゼミを選ぶことができた。

いろいろな人と関わることによって、周りからの影響もあり、私は積極的にいろいろなことに取り組むようになった。この3年半で友だちも増え、充実した大学生活を送ることができている。

ゼミで1回生の頃の話をする、よく「絶対卒業まで関わることはないと思っていた」と言われる。大抵そう言われる子に対しては私もそう思っていたことが多かった。しかし、同じゼミに入って初めて深く関わってみたり、いろいろな話をしてみたりすると、尊敬する部分がたくさんあり、私自身成長させてもらった。

これからもゼミの12人＋吉永先生と一緒に成長していきたい。

学びの世界

大学に入ってから私の中で学びに対する概念が、「教えられるもの」から「自由に考えるもの」に大きく変わった。

大学に入るまでの私は、「学び=机に向かって勉強すること」という概念が自分の中にあった。机に向かって勉強すればするほど、自分の実力が上がっていくという感覚をもっていた。また、勉強にはすべて答えが決まっており、いくら自分が考えて導き出した答えでも、間違えていたら正しく直すという作業を永遠にしていた。つまり、答えの決まりきった世界の中での学びをしていた。教師から教えられることが学びの全てであり、与えられたもの全てに対して、その通りに覚えないといけないという概念が強かった。

しかし、大学に入ってから学びは今までのものとは違うものだった。ある授業の中で、さまざまな方法や環境でレゴを高く積むということをした。1人・複数人で積む、片手・両手で積むなど、条件が変わった。それ以外は、「レゴをできるだけ高く積んでください。」とだけ言われ、何度も行った。その後、どの条件がより高く積むことができたのか、またその条件の違いから、もっと高く積むためにはどのような工夫が必要なのかを考えた。使える手の条件によって難易度が変わった。また、人数の条件が変わるだけでさまざまな意見に触れることができ、1人の時にはなかった方法や作戦でより効率的に高く積むことができた。この経験から私は、周りの変化がもたらす影響、物事にはさまざまな視点があること、何事も考えながら行動することの大切さを学んだ。

このような授業での学びを通して、私は、大学では経験や与えられた状況を経て何か自分で考えたり、感じたりすることこそが学びであるということに気がついた。誰かに教えてもらうだけが学びなのではないということを知った。大学での学びは今までのように知識を学ぶものもある。だが、その知識を「どう活かすか」、与えられたものに対して「自分がどう考えるか」が今までの学びとの大きく違う点だと感じる。

これに気がつけたことで、私の学びは広がった。今までは、一本のルールの上だけの学びであったが今では至る所にまで伸び、自由に考え、答えることができるようになった。自分の意見が求められる機会が増えた今、もしかすると今までの学びの概念は、自分の中で一本のルールの上にしかないと決めつけていただけなのかもしれない。

学びに対する変化に伴って、私は、自分の意見に自信を持つことができるようになった。今までの学びには答えがつきものだと考えていた私は、答えを求められる際、間違えることに抵抗があり、自分の意見に自信が持てなかった。しかし、大学では決まった答えを求められることはなく、自分の感じたことや考えたことこそが大切にされている。そのため、今まで周りの意見に合わせてきた私は、どのような場面でも意見を受け入れられることで、自分の意見に自信を持つことができるようになった。時には修正されつつも、その考えをベースに学ぶことができていると感じる。これが私の自信につながり、今では以前よりも与えられた状況に対して自分で考え、自分の意見をしっかり持ちながら日々学びを深められている。

楽から楽しいへ

少し前までの私は、クラス単位の集団の中ではできるだけ大人しく過ごしたいと思っていた。そして、クラスが団結できるようにと頑張っている人たちを冷めた目で見てしまっていた。その理由は、中学生になり新しく出会った人たちが今まで出会ったことのないタイプで、合わせるのがしんどくなったと考えられる。そのため、集団で決め事をする時に自分の意思を強く持つことはなく、意見があってもわざわざ発言しようとしなかった。流れに身を任せ、楽に生きていたのである。

大学に入学する直前まで、遊びを優先させるような大学生活を送りたいと考えていた。また、部活じゃないからすぐ辞められるだろうという軽い気持ちでサークルに入会しようと思っていた。この時の私は、この先も楽な人生にすることばかり考えていた。

大学に入学するとすぐに、初対面のメンバーと2週間練習してダンスパフォーマンスをするという課題が出された。今までの私からすると避けたいと思うような課題だった。しかし、本番まで時間がなく、やるしかない状況だった。全員これから4年間共に大学生活を送る友達になると思うと、ただ流れに身を任せることはできなかった。そのため、自分が力になれることはないか考えながら2週間を過ごしていた。このダンスパフォーマンスが終わった時に達成感があった。楽に生きているのはしんどいことも少ないが、そこまで充実した日々ではなかったことに気づかされた。

こども学科の授業ではグループワークをする機会がたくさんあったが、そのたびに人任せにはせず、自分にできること、できるかもしれないことから考えて取り組んでいくようになった。それだけではなく、できるかどうか分からないけど挑戦してみようと思えるようになった。

サークルでは、先輩から幹部になってみないかという声かけがあった。私に幹部が務まるのか不安で迷っている時に、大学で先生が言っていた「できるかどうかはやってみなきゃ分からない」という言葉を思い出し、挑戦してみることにした。幹部をしている1年は困難もたくさんあったが、それ以上に楽しいことも多く、幹部になってよかったと思うことができた。

楽に生きることを考えていた時は、満足感を得られることがほとんどなく、常に心の中が少しモヤッとしていた。しかし、大学生になり様々な経験をしたことで、達成感や満足感を得られることが増えた。そして、そこに行きつくまでのプロセスも含め楽しいと感じるようになった。

気づくと、楽な生活から楽しい生活に変わっていた。

この変化を大切にして、自分の力になること、学びへとつながることは何かを考え、様々なことに挑戦しようと思う。そうすることで、達成感・満足感を得られるような充実した楽しい生活をこれからも送っていききたい。

「自分ごとを考える」ということ

私の人生は予想外の連続でできている。浪人を経験したこと、同女のことも学科に入学したこと、大学卒業後に考えている進路についてなど、高校生の時には想像もしていなかったことばかりである。しかし、これらは決して間違った選択をしているのではないと、今だから胸を張って言える。「これでいい」ではなく「これがいい」という方向に進むことができている。なぜなら、私一人で決めたことではなく、母親、友だちなど、私と関わってくれている人と一緒に決めたことだからである。

高校生までの私は、自分のことはすべて自分ひとりで決める、という考えが強く、「自分のことだから」と周りに遠慮をして話さないことが多かった。今思えば、普段の生活にも現れていて、友だちとの会話の中で「あのさ、」と自分の話をするとき、『私の話なんかしても、みんなにとったらどうでもいいかな』という考えがよぎり、話すことを辞めてしまっていた。そのうち、「『やっぱりいいや』が口癖になっている」と友だちに指摘された。しかし、そのことに気づいたからといって何かが変わったわけではなく、周りとの関わり方は今までのままだった。このときの私にとって、「自分一人で」考えるということは、集団生活の中でも自分は自分なんだ、周りに頼らなくてもひとりでも生きていけるんだ、ということを感じたく、周りにもそれをアピールしたかったのかもしれない。

大学に入学前の私は、学校、アルバイト、でしか人との関わりがなかった。しかし、大学からはアルバイトを掛け持ちし、ボランティア活動を始め、学内でも様々な行事に取り組んだ。そして、人との関わりがどんどん増えていき、この3年間で本当にたくさんの出会いがあった。そうした環境の中で、一人一人との関わりを増やすためにも人の話を聞くことだけでなく、自分の話・意見を聞いてほしいと思うことが増え、自分から話すことが多くなったと感じる。これを機に、それまで〈浅い〉付き合い方だったものが〈深い〉付き合い方に変わっていった。そして、それらの関わりが自分の考え方に少しずつ足し算をしてきている気がする。最近で言えば、院への進学を決断したことが大きな出来事である。

3回生になり進路について考え始めたとき、今まで教師一択だったが、心理学について「もう少し勉強したい」という気持ちが芽生え始めた。しかし、心理学をこれまで専門的に学んできていなかったため、大学4年間で専攻していなくても院に進学できるのか、わからなかった。さらに、教育実習やボランティアを経験すればするほど早く現場で働きたい、という気持ちも強まった。そんなとき、ボランティアでお世話になっている方に将来のことを聞かれた。悩みを話すと、徳島に住む同じ道に進まれたボランティアの先輩を紹介してくださり、会う手配までしていただいた。また、友だちにも悩みを話すと、「院に進学してからでも遅くないし、進学することで視野が広がるんじゃない？」という言葉ももらった。こうした周りの人との関わりが、院進学への気持ちを固めることができた理由である。

今の私にとって「自分一人で」考えるということは、考えを整理することである。自分の考えを確かめるひとつの作業で、その作業は人にアウトプットするために必要なものであり、人からの意見をインプットするためにも必要なものである。ひとりで考えていても、結局は周りに助けられている、ということに気づいたのだと思う。

吉永先生より

わたしを物語り、わたしと出会い直す旅路に伴走して

「何を書いたらいいのか、わかんない…」 「わたしって変わったん？」

“ミライバトン・プロジェクト”は吉永ゼミ3年生の秋学期に始動するが、今年の第5期生の始まりは（いや，“も”かな？）かなり難航した。“ミライバトン”の趣旨を伝え、今年はどうしていくか、ミーティングを重ねた。これまでの4期が創ってきた作品とは少し趣向を変えて創りたいという思いは彼女たちから伝わってくる。ところが、ゼミを重ねるごとに一人ひとりの顔色が曇っていくのが手に取るようにわかった。何が彼女たちをそうさせているのか。そのときは、わたしにもその正体が見えていなかった。

“転機”（とわたしは捉えているのだが、彼女たちはどう感じているだろうか）は突然訪れた。4年ゼミ生との合同ゼミで、5期生が4期生にミライバトン・プロジェクトの現状を語り、困り感をすなおに打ち明けた。4年生は自分たちも一年前に同じように苦しみもがきながらプロジェクトを創ってきたためか、アドバイスというより自分たちの経験や事実を伝え始めた。その翌日から5期生は具体的に動き出した。ゼミ以外の時間に集まって、緊急ミーティングを開き、先輩から聴いたことをシェアして自分の考えを語り始めた。

「みんなで創っていくんだけど、ゼミ以外の時間に、全員が集まれないからといって立ち止まったままじゃなくていい。集まれるひとが集まって動いたことを、ちゃんとシェアすればいい。」

「まずは書いてみる。書いてみるなかで、自分たちが大事にしたい“本を創るうえでの軸”は決められる。スランプを脱出するには“書く”しかない。書いたものをもとにしてとにかく話し合う。でも、一人だけで書いていると、自分に酔ってしまうから、個々が書いたものに質問しにくる。」

大きく分けると、【「みんな」縛りを解除すること】×【「個」のふり返りを支える「他者」で居ること】の2つが、彼女たちが見出した「スランプ脱出法」である。改めて見つめ直してみると、この2つにはとて

も重要な問題提起が隠れていることに気づかされる。【「みんな」縛りを解除すること】は簡単なようで容易ではない。ではどうして彼女たちはここを乗り越えることができたのだろうか。“なんとかしたい、できることを見つけて動き出したい”と思っているのは、自分だけではない。その日、出席できる人が果たす役割と出席できない人が果たす役割がそれぞれにあり、それを一人ひとりが果たそうとしていることへの信頼が、「みんな」縛りを解除した後押しになったのかもしれない。相手を信頼してみるということが、自分の内なる囚われ―「みんながいないと、動けない？」―を壊していく一歩のようだった。

そしてそれ以上に大きく彼女たちを“変えて”いったのは、現代こども学科に入学して以降、自分がどう変わったか、何が変わったか、いつ変わったか、なんで変われたか、変わったことをどう思っているか…を、幾度となく自分自身に問いかけ、わたしの“いま”と“過去”を見つめ直す時間＝書く時間を粘り強く持ち続けたことだろう。しかも、個々がふり返って綴った言葉に対して、安易に「わかる！わかる！」とは言わず、《突っつき合い》と称して、「なんでそう思ったん？」「そこで考えたことって、これで表現できてる？」「なんか、言わんとすることは伝わるけど、今一つピンとけーへん！」…と、徹底して「他者」として受け止めることに一人ひとりが挑戦していた。かねがね、ゼミで大事にしたいこととして、「共感と批判は共存できる」と考えていたが、まさにそれを実践してきたのが彼女たちである。自分のことなのに、自分のことを語ろう／綴ろうとすることがどれほど難しいことであるか、お互いに共感している。だからこそ、一人ひとりが懸命に紡ぎ出した言葉を、簡単にわかろうとせず、相手自身もまだ実は気づいていないかもしれない間隙を突く。まさに「自分に酔っている」感がすれば、手っ取り早くその言葉にすがりつくのではなく、粘り強く次なる言葉を生み出すことを手助けしたりする。「わかりあえない」ことは、関係の終焉を意味するのではない。「わかりあえない」からこそ、「わかろう」としてさらに相手にかかわっていく、その余白を残してくれている。

それぞれが違う道を歩んで、たまたまここで出会ったのだから、それほど語り合ってもいない間柄で、簡単に「あなたのこと、すぐわかるよ」と言われることのほうが実は案外、落ち着かなかったりもする。

人と人とのあいだには、性と性とのあいだには、人と人以外の生きもののあいだには、どれほど声を、身振りを尽くしても、伝わらないことがある。思いとは違うことが伝わってしまうこともある。

〈対話〉は、そのように共通の足場を持たない者のあいだで、たがいに分かりあおうとして試みられる。

そのとき、理解しあえるはずだ、という前提に立てば、理解しあえずに終わったとき、「ともにいられる」場所は閉じられる。けれども、理解しあえなくて当たり前だ、という前提に立てば、「ともにいられる」場所は、もう少し開かれる。

〈対話〉は、他人と同じ考え、同じ気持ちになるために試みられるのではない。語り合えば語り合うほど他人と自分との違いがより微細に分かるようになること、それが〈対話〉だ。

（「対話の可能性《序》」 せんだいメディアテーク館長 鷺田清一）

<https://www.smt.jp/dialogues/> より一部転載

鷺田清一は言う。〈対話〉は、他者へのわたしのまなざし、ひいてはわたしのわたし自身へのまなざしを開いてくれるのだと。彼女たちがミライバトンで続けた《突っつき合い》は、まさしく《対話》であり、幾度となく自分の原稿を持ち帰っては書き直し…を繰り返せたのは、「他者」で居ようとした仲間の存在、仲間のまなざしを通して、わたしのわたし自身への新たなまなざしを開こうとしたからではないのだろうか。そうして、わたしの「変化」をふり返り、物語るなかで、わたしと出会い直し、わたしを発見してきたように思えてならない。決してだれかに語ることのなかった自分の経験の“事実”を語るにとどまらず、その出来事に対する自分の解釈、そのときの自分の正直な気持ち、ある種の自分の“弱さ”を他者にさらけ出すことができる“強さ”さえ、いまの彼女たちからは感じられる。

わたしの変化を見つめてみることに、わたしがわたしに問いを投げかけ、ふり返って見えてきたことを言葉にすることが、どれほどひとをたくましく成長させるのかを、わたしはこれまでのミライバトン・プロジェクトを通して知っていたはずなのに、これほどその意味を考え直す場を持つとしていなかったかもしれない。ところが、5期生からは、この原稿に対する要望が届いたのである。

ミライバトン・プロジェクトでは、テーマやコンセプトが決まり、各自が提出する原稿が出揃い始めると、わたし自身も原稿を書いた。特に何の要望も提案も受けず、ただ自分が書きたいことを書いていた気がする。もちろん、そのときどきのゼミ生たちのプロジェクト・ミーティングを通して、考えさせられた言葉や問いを持ち帰り、自分の過去や情けない経験もさらけ出して語っていたつもりである。

しかし、5期生はわたしに書いてほしいことを伝えてきた。5期生がどう変わったか、その姿を見て、吉永がどう感じ考えているかを綴ってほしいと。思えば、非常にハードルの高い要望であった。だからこそ、この要望を受けたおかげで、わたし自身が見えていなかったことをふり返る場を持たせてもらった。わたしにとって、このことは、ミライバトン・プロジェクトの一員として彼女たちと“対等なひとり”であることを、彼女たちに認めてもらえたことのように思えてならない。教員が課題を出すプロジェクト、いわばゼミの決め事として、「やらされる」活動止まりで終わっていたかもしれないものが、もはや、学生が教員に課題を出すプロジェクト、自分たちの手で創り上げてきたことを、最後まで「やり遂げたい」活動になっている。ゼミで出会う彼女たちの表情は、冒頭にしたころとは比べ物にならないほど、変わった。自分を見つめることで得られた強さと、仲間と自分に対する信頼と、まだ自分はこれからの変わり続ける存在であるということへの期待がみなぎる、すがすがしい表情である。

学生のチカラは本当にすごい。こんな陳腐な言葉では言い表せないほど、5期生の底力に魅了される。間近でそうしたチカラを感じ、自分自身もそのチカラに触れて「よし！まだまだ！（not yet!）自分も挑戦したい！」と思わせてくれる、この仕事は楽しさに満ち溢れている。多少の苦しさももどかしさもやるせなさもあるけれど、それを大きく上回る価値に気づかせてくれた彼女たちと、つぎにどんなプロジェクトでチャレンジできるか。いまからワクワクが止まらない。

to be continued...

あとがき

「道」＝「私たちの歩む人生」

私たち13人は、今までそれぞれの「道」を歩んできました。一本道を突き抜けてきた人、回り道をしてきた人、たくさんの分かれ道と出会ってきた人。誰一人として同じ道を歩んできた人はいませんでした。

一人ひとりの歩んできた道がつながり、偶然出会ったのがこの13人でした。出会ってからは同じ時間を共有し、同じことを学んできました。しかしその中でも、学びに対する“受け取り方”は一人ひとり違いました。その“違い”が作り出したのがこの本です。書き手の私たちにとっても、自分の“変化”を振り返るきっかけになっただけでなく、新たな価値観や考え方に出会うきっかけになる一冊になりました。

この“きっかけ”を大切に、私たちはまた、それぞれの「道」を歩み続けます。

道

【意味】

目的の場所に至る経路やその途中/ある目的や結果に行きつく道すじ

私たちがこの本を書く中で大切にしていたことがあります。それは、「リフレクション」をすることです。リフレクションとは、過去の出来事を振り返り、その出来事に対して自分がどう向き合ってきたのかを自分の中に落とし込む、ということです。その場で感じたことをそのままにするのではなく、なぜそう思ったのか・なぜ心を動かされたのか、ということを振り返り自分なりに考え答えを出すからこそ、“変化”していることに気づいたり、“変わりたい”と思うきっかけになったりします。

変化の“きっかけ”はどこにでもあります。

みなさんも、あなた自身の「道」を歩み続けてください。

編集後記

この本を書く前も、書き終えてからも「私は私」。変わらないはずなのに、いくつもの大きな変化があることに気づかされました。自分で自分を知ることは意外と難しかったです。みなさんは自分のこと、知っていますか？

N.T

この本を書く過程を振り返ると、吉永ゼミ12人全員がいなかったらできなかったという事、できない事を支えてもらいできる事で支え合うことが大切だと気づきました。人のつながりを大切にしようと、「成長」もできました。日々私たちは様々なことを経験しています。その中で「変化」しています。この本を手にとってくれた人に「振り返る」ことで、「気づき」「成長」できる本になりますように。また、皆さんの自信や何かの力になりますように！

T.N

この本を作るにあたり自分と向き合うことで、大学生活を通して変化している部分があり、その変化には大事な意味があったことに気づくことができました。この本を読んで、共感したり、新たな視点を取り入れたりすることで、自分と向き合うきっかけになり、何か皆さんにプラスになるものがありますように。

N.N

「自分もなにか変わっているのかな」と、少しでも振り返るきっかけになって欲しいなと思います。自分でも気づけていなかった、見えていなかった変化にたくさんの人が出会えて、今の自分を大切に思える本になりますように・・・。

S.M

私自身、この本を書く前には気づけていなかった自分の変化に、書きながら気づくことが多々ありました。何も変わってないと思ってしまったら変わっていないかもしれません。でも、私たちは日々小さく進化し続けています。この本を読んだ人自身の小さな変化に気づくきっかけになって欲しいと思います。

I.M

私たちはこの本を作ることをきっかけに、自分と向き合い、その時には気付かなかった発見や成長した自分を見つけることが出来ました。この本を読んだ人にとっては、この本を読むことが自分を振り返るきっかけになり、自分の成長や自分らしさを発見できる、そんな本になればいいと思います。

K.R

過去を振り返ることで、今を生きる自分への力になりました。この本をきっかけにみなさんも今までの人生を振り返ってみてください。

K.R

この「13→1」を作る中で自分自身の変化に初めて気づくことができました。13人の変化を合わせて作った「13→1」。それぞれが日々少しずつプラスに変化しています。この本が皆さんにとって自分の変化に気づくきっかけに、自分を好きになるきっかけになってくれたらいいなあと思っています。

A.A

この本を作っている時、私達12人は自分の他の11人の大学3年間での成長について考えました。はじめは人の成長と自分は関係ないと思ってたけれど、読んでみてすぐに、自分にも当てはまる事ばかりで、人の成長を見ることは自分を成長させてくれるんだと気づきました。この本で私たちの成長を見ることがあなたの成長の役に立てたら嬉しいです。

I.M

この本を作ることで自分を知るきっかけになりました。過去の自分を振り返ると様々な場面で変化しています。その変化と向き合い自分を見つめることが大切かなと思いました。今の自分が変化をし続ける“未来の自分”に会いたくなるそんな一冊になっています。

O.A

この本を書くにあたって、私は自分自身を振り返るということを21年目にして初めてしました。実際に振り返ってみると、沢山の变化がありました。その変化を知ったからこそ、これから成長出来ることやこれからの人生を楽しんでいこうと思えるようになりました。しかし、私は振り返りがなければその変化に気づかず、成長には繋がっていないと思います。振り返るということは、自分自身を再度確認することだと思います。自分を振り返るということは、あるきっかけがないとなかなか出来ません。この本を読んで自分を振り返るきっかけになるといいなと思います。

K.M

この「13→1」が読んだ人にとって、自分を見つめ直すきっかけになってほしいです。自分の変化やきっかけはもうすでにあるかも知れない、これからあるかもしれない。それは自分をみつめなおさないとわからないと考えます。誰だって、少しのきっかけや人との出会いによって変われるということを少しでも知ってもらえたらと…

T.K



2 0 1 9 1 0 1 4



2 0 2 0 0 1 2 4



Yoshinaga seminar 5th
